



Title	カメルーン・バメンダ高原 ティカール族のラフィア染色について
Author(s)	井関, 和代
Citation	デザイン理論. 1994, 33, p. 88-89
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53065
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

カメルーン・バメンダ高原 ティカール族のラフィア染色について

井関和代／大阪芸術大学

はじめに

西アフリカ・カメルーンの北西部州に広がるバメンダ高原，その中心都市バメンダ（Bamenda）の市場には，周辺の村々から買物客が集まる。店を覗く男たちの肩に，ラフィア製の袋を掛けているのを多くみる。また店の軒先にもさまざまな彩りと意匠に満ちたラフィア製の袋が吊り下げられている。

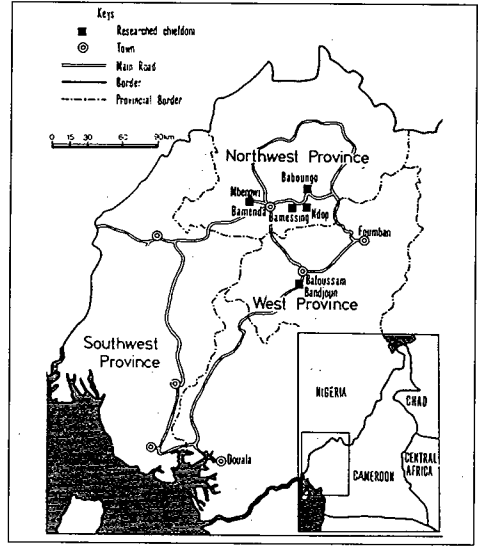
この光景は余りにも日常的であり，高原の至る所でラフィア製袋の使用を見る。また観光客にも簡単に手に入れることができることから，早くからこの地方の工芸品として研究者たちの間で，その存在が知られていた。しかしながら，製作地の村々が草深い地であることから，この織技術やティカール（Tikar）族の村（伝統的首長社会）における使用上の社会的背景についての詳細は，これまで調査されずにきた。

そこで1986年度の調査¹⁾では，ラフィアの染織技術の詳細と，この地方の村々の技術の比較研究を計画した。そして調査の中心地となったバメッシング村（Bamessing）では，吊袋の使用者と使用方法から，村を構成する「結社」の存在を知ることになった。1988年度にはこの手がかりから，村を構成する社会的背景，そして製作上の装飾技術における位置づけを調査した。

本発表では，ラフィア袋にみる装飾のうち，「織・刺繍」よりも「染色」にある，優位性についての報告をすることにしたい。

ラフィア繊維と織技術

ラフィアとはマダガスカル原産のヤシ科の



地図，カメルーン及び調査地

植物で，西アフリカから中央アフリカの河川や沼地近くに育成し，これらの地域では，このヤシの葉・軸・幹・根は云うに及ばず樹液までも生活に利用する。本テーマのラフィア製袋も，この幼葉から得る繊維を素材とする。

ラフィア繊維はサハラ以南のアフリカの「木綿以前」の布として，樹皮布や獣布とともに存在したと考えられている。この繊維による織機は，タテ糸を保持する上下棒を，立木や矩形枠に止め，張ったタテ糸にヨコ糸を挿入するといった原始機である。（アフリカ各地またバメッシング村の原始機の技術については[井関 1989, 1992]などにすでに報告）

染色

バメッシング村では，週に一度開かれる市の日にハウサ（Hausa）族商人から購入する合成・天然染料と，村の周辺に育成する植

物を使用してさまざまな色を得る。村における伝統的な染色には次のようなものがある。

黄色はショウガ科の鬱金 (*Nyah, Curcuma Domestica VALETON*)。赤色はマメ科のカムウッド (*Bowe, Baphia nitida AFZEL*) から、橙色はこの2種類を合わせて得る。黒色はカキノキ科の樹皮と、フェカングアと呼ぶ草で染色した後、鉄塩を含む泥地に繊維を浸して得る。他に茶、褐色は樹皮から、緑色はマメ科のクロタラリア種の2種類の植物から得る。

このような色系は、平織による格子・縞・網代文や、縫取織²⁾による文字・動物文、また製織後の刺繍にも使用されるが、色そのものに特別な意味は持たないという。

バメッシング村における吊袋の位置

村でのラフィア吊袋の生産は、各職人の自由である。だが誰もが勝手に、何の意匠を製作しても良いものではなく、職人の住むコンパウンドのチーフの日常の監視、その上に17地区の地区長、さらに大地区長から首長へとつながる監督下にある。村での首長の存在は、世俗的・宗教的に頂点に立ち、彼の組織する行政・軍事・宗教などの構成は全て秘密とされ、口外することが憚られる。ただ、村での収穫祭 (*nukie*) などで宮殿内に集まる村人の中に、宮殿にある首長の袋と同じ意匠の袋を多く見ることができる。それらは豪華な房飾りに、菱形文や牡牛文などを刺繍したものである。これらの袋と幾つかの表徴品 (赤い羽根、帽子、ヤマアラシの刺) などから、村の世俗的な構成は窺うことができる。

しかしながら、村人の前にも滅多に登場することなく、夜間や極秘に行なわれる儀礼に登場する吊袋は、生成りの平織が多く、また、これを執り仕切る強力な呪術者と首長のみがもつ袋は、単純な巻絞り技術の松傘絞³⁾や

焼ゴテで円文などを捺したものである。

おわりに

バメッシング村のラフィア吊袋の装飾意匠をまとめて見ると、幾何学文様や動物文様にそれぞれの意味やメッセージが込められているものの、それらは時間をかけた製作過程の中で、一目一目、製作者や周りの者が確認しながら作り上げていくものであった。

彼らが秘密裏に製作し、最高位とする吊袋の意匠は、調査者の目から見れば単純な染色行為にすぎないものであった。だがその単純にして、一瞬に色に変化する不思議さや、その表現の善し悪しが寸時にして決定づけられることや、染色後も布そのものに何らの変化がないことを、村では呪術的な力とされていることが明らかになった。

これは単にバメング高原の一村の問題でなく、始原的な意匠を観る際には、単に表面的なデザインを探るだけでなく、そこに存在する技術的背景までもを、捉えなければならぬと考えられ、今後の民族集団の意匠分析をすすめていきたい。

注1) 本調査は昭和61、63年度の文部省科学研究補助金による大阪芸術大学海外調査「熱帯アフリカ文化領域における工芸文化の比較研究」(隊長森淳教授)に参加。

2) 縫取織 (ヌイトリオリ)。紋織りの1種類で織物の一部に文様を表す時、縫取用のヨコ糸をその部分のみ織り込む方法。

3) 松傘絞 (マツカサシボリ)。布をつまみ、その部分を糸でくくり、染色すると円状に防染でき、この形から名前が由来。

参考文献

井関和代:

- 1987 「カメルーン・グラスフィールドのラフィア染色」『染織 α』vol, 78
- 1989 「バメング高原・バメッシング村のラフィアバッグ」『芸術11』
- 1989 「ザイール・クバ族のラフィア染織」『国立民族学博物館研究報告別冊12』
- 1992 「ラフィアバッグの村」『季刊民族学』vol, 61

Lamb Venice & Alstriar:

- 1981 『Au Cameroun weaving tissage』Roxford books